

2月



川系男子の『川と人』めぐり No. 32～松美下池～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

♪雪やこんこんあられやこんこん 降っては降ってははずんずん積もる
山も野原もわたぼうしかぶり 枯木残らず花が咲く

(文部省唱歌『雪』 作詞：不詳・作曲：不詳)



図1 筑波大学筑波キャンパスの一部と松美下池 (国土地理院2万5千分の1の地形図に加筆)

1. 人知れず残された関東平野の原野が大学に

2015年1月24日(土)、冬晴れの午後、大学内の松美下池を潜入調査した(図1)。この池は学内でも存在を知る人は少ない。大学の本部棟や主要エリア、幹線道路のすぐそばにあるのだが、通常通行しているだけでは存在を気が付かない。一步、道路からはずれ、藪の中に入り込んだ者だけがその池の姿をみることができる。

しかし、航空写真や地図などでみると、たしかにそこに池は存在するのである。

この池の話をする前に筑波大学のキャンパスについて紹介したい。

2. 筑波大学の沿革の背景

1950年代、東京の急速な人口増加の過密状態を解消するために首都機能の一部移転が検討されはじめた。移転先は東京都内から60km離れた茨城県の筑波山麓地区が選ばれ機能上必ずしも東京都の既成市街地に置く必要のない官庁の集団移転が検討された。それに伴い、1967年から各省庁の研究機関を中心に移転がはじまり研究学園都市が成立することとなる。面積にして2,700haと国をあげた大開発となった。

筑波大学の移転もこれに伴い行われた。筑波大学のはじまりは1872年(明治5年)にわが国に最初の東京師範学校として発足したことからはじまる(2015年10月1日をもって創基144年)。その後、東京文理科大学、

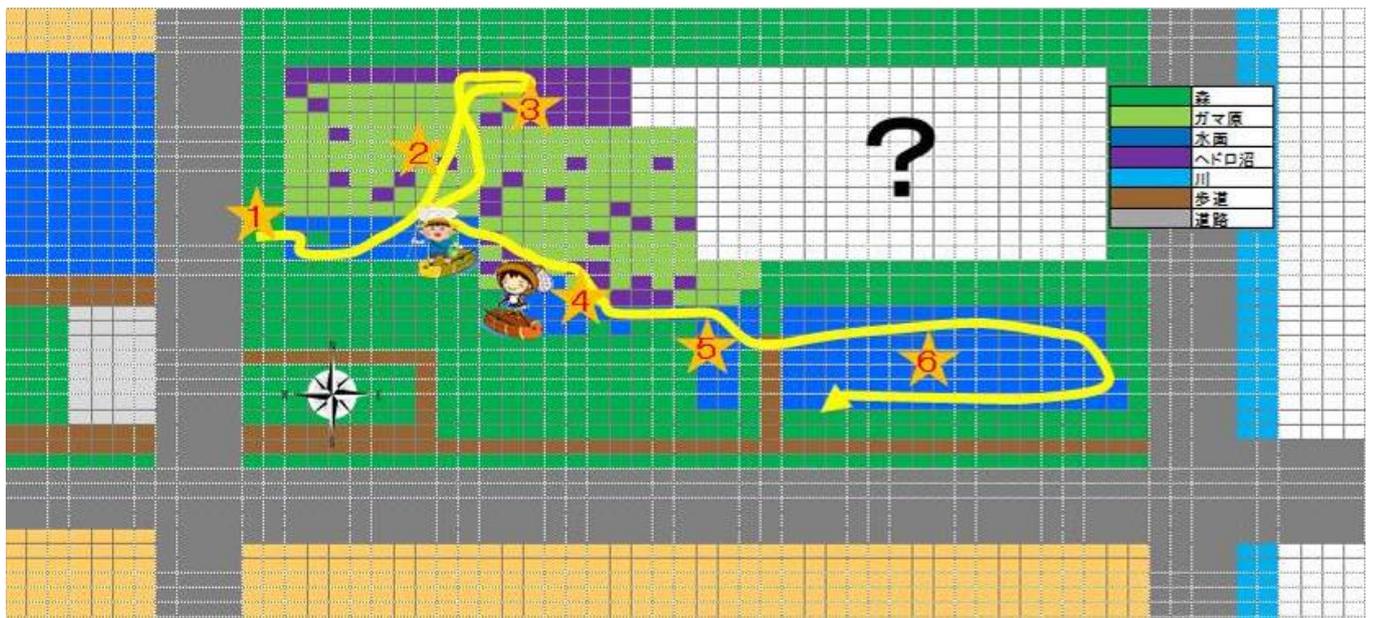


図2 松美下池ダンジョン図（ダンジョン：「迷宮」の意味）

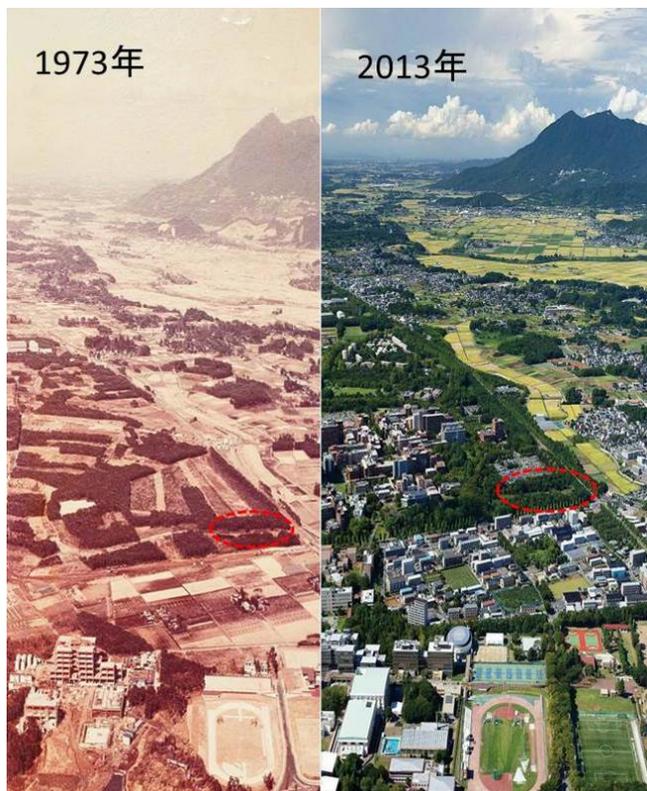


図3 筑波大学キャンパスの今昔と松美下池（赤囲い）
（筑波大今昔展のチラシ写真を筆者加筆）

東京教育大学の変革を経て、筑波大学となる。

筑波学園研究都市の移転構想と同時に東京教育大学を「新構想大学」として筑波の地に移転させたのである（1973年の筑波大学法案（国立大学設置法の一部改定案）により成立）。

東京都内から筑波山麓の田園地帯に移ってきた筑波大学は広大なキャンパスを保有することになる。その規模は南北約4km、東西約1km、総面積257haと日本の大学の単一キャンパスとしては最大級である。

当時を知る大学教員の話では、開学当初、ここはアカマツ林や湿地などの残る原野のような場所も多くあ



図4 ループと松美上池と松美下池

ったそうだ（図3）。雨の日は車が泥にはまる悪条件の場所であったそうだ。それが時代とともに整備が進み現在の研究棟の多く立ち並ぶキャンパスとなった。

3. 開学当初のままの姿を残す松美下池

40年近くの歴史の中で開発が進んできたキャンパス内だが、当時からあった池を利用し、建物から排出される中水の排水を集める調整池として利用した。そのため、学内にある池は当時のものを利用している。その中でも研究棟や宿舎に隣接するものは護岸整備を行い整備された池となっているが、一部キャンパスの緑地保全地区に指定された場所は開学からほとんど手付かずで、松美下池もその一部である。

松美下池のある場所は大学のループと呼ばれる幹線循環路の東側にある（図4）。ループの西側には松美上池があり、こちらは自然科学・人文社会学系の建物が多く立ち並ぶ一学エリアと呼ばれる部分で、池のほとりも学生が散歩したり昼寝したりと賑わいのある池である。一方でループの東側に位置する松美下池は周囲を木々に覆われており、道からはその存在を確認することもできない。木々をかき分けて中に入ると、いかにも人を寄せ付けない雰囲気漂わせる池が姿を現す。開学当初から手付かずのこの池は40年近く、開発の手

表1 用意した道具

安全対策用具	ライフジャケット, 胴長, ボート, オール, 長靴, 救命用浮き輪, 救急セット, 笛
生物採集用具	サデ網, タモ網, 金魚網, バケツ, 魚仕掛け(網型), 仕掛けのエサ(ツナ, 味噌, インスタント麺)
観察用具	望遠鏡, カメラ, ビデオカメラ



図5 用意した道具



図6 潜入開始

も入らずこの姿を保ってきたのである。

2万人の学生と教職員がいるこのキャンパスの中で、年間に何人がわざわざ藪をかき分けてこの池の姿を見ようとするだろうか？ごくごく少数の人数しかいないであろう。今回4名の有志の潜入調査団を結成し、その全貌を明らかにするべく謎めいた原野の池に挑んだ。

4. 松美下池潜入開始(図2の地点1)

今回の調査の目的は池の全貌を把握することと、池の中にどんな生物が生息するのかを調査することであった。

そのためには安全対策を万全にした装備と体制を整える必要があった。装備は表1・図5のように揃えた。

さらに安全に調査を行えるよう、水中班は常に二人一組で、ボート2艇で行動し、緊急時の連絡役として陸上班を2名置き、救助用浮き輪等も準備を整えた。水辺での活動には常にリスクマネジメントが重要で、これでもかというくらいの準備が事故を未然に防いでくれる。

一緒に潜入した後輩Kと私がボートに乗り、探索を開始した(図6)。1月の冬空は晴れ渡っていたが空気はヒンヤリとしていた。気温10℃、水温は8℃。陸上班は笑顔で我々を見送る。

まずは水面付近に横たわる木の幹に魚の仕掛けを括

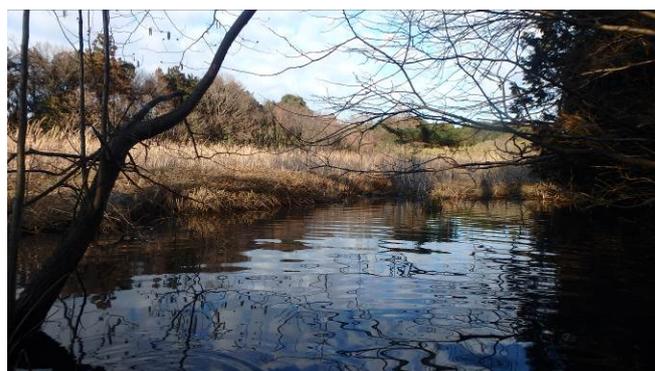


図7 池の水面部と陸上部(ガマ原)



図8 ヘドロ化した水面部

り付ける。この仕掛けはエサをいれておき、その匂いに魚が集まり、中に入ると出られなくなる。仕掛けを設置し、池の果てまで漕ぎ出た。

池は大きく分けると水面部と抽水植物で覆われた陸地化部分の2つに分けられた(図7)。陸上部といっても水分を多く含む沼地である。水面と陸の割合は2:8くらいで、ほとんどがガマ原で覆われている。

スタート地点から見渡す池は周囲の木々が多い。その中に広大なガマ原が広がり、時々空に水鳥が舞う。周囲の木々が道路、建物などの人工物を完全に見えなように遮断しているため、時空を超えて異世界に迷い込んだような錯覚に陥る。Kも舟を漕ぎながら空を仰いでいる。水位は思ったよりもなく、非常に浅い。せいぜいひざ上くらいだ。舟も浅い水位で座礁したので、舟を降り、水底へ足をつっこむ。ところが、片足を入れた途端に、足は突然泥の底に消え、胴長の腰付近までずぼった。思ったよりも沼は深い。舟にっかり体制を立て直し、表面積をできるだけ大きくして、船体に捕まり、水面を蹴り、泥を掻き分けるようにして進む。なんとか陸地部までたどり着き、そこを足掛かりに広大なガマ原に上陸を果たした。

5. ガマ原を掻き分け沼地に行く(図2の地点2~4)

私が先に上陸を果たしたので、Kの上陸を手助けした。手を差し出し、思いっきり引っ張り上げる光景は某栄養ドリンクのCMでよく見るシーンとよく似ている。冬のガマ原は枯れ果てていて一面ガマ原でどこからどこへ向かって歩けばよいか迷いそうだが、まずは枯草の枯れた箇所を掻き分けて池の中を北進する(ダンジョン図内の2~3)。冬だからこそスカスカになった草の中を進めたがこれが夏ならこうはいかないだろう。



図9 協力して進む



図11 調査を終え疲れ果てた2人



図10 池の排水口

池の最北部に到着すると、黒くヘドロ化した水面が姿を現した(図8)。水面に足をおそろおそろ突っ込むとドンドン引きまされるので、途中で足を引き戻した。霞ヶ浦の水の滞留時間ですら230日以上はあることを考えると、水の流れが極端に乏しいこの池の滞留時間は1年以上あるだろう。そのため、腐った木々は水底に堆積を繰り返し、ヘドロ化したものと思われる。

サデ網とタモ網を入れて生物を探してみたが、特に見つけれなかった。

その後、ボートを泊めておいた場所まで戻り、東を目指した(図2の地点5)。東側に行く際この先がどのくらい足場が悪いのか未知数だったので、ボートを1艇2人で引っ張ってもっていくことになった。

ボートを持ってきたのは正解で、途中、ガマ原の中でも極端に足場が悪いところがあり、そこは舟に上半身を預け、膝立ちのような体制でできるかぎり表面積を大きくして、ずばらないようにして進んだ。ところどころで、どちらが足を沼地にとられながらも助け合いながら進んだ。掻き分けて進むと、時々遠くのほうで、水鳥が数羽バサバサと飛び立つ。カモ類が越冬にきているようだ。ここならば水鳥も安心して羽を休められる。西日が差す、西の空を振り返ると、大学で一番高い講義棟が遠くに見える。

6. 沼地を越えて(図2の地点4~6)

2人はさらにガマ原を掻き分けて進んだ。途中何度も足を取られながらも、ひたすら進んだ。ようやく南側の水面のあるところまで到達した(図9)。木陰になっ

ている水面にはところどころ氷も張っている。当然ながら水温も低い。午後を過ぎて少し寒くなってきた。日没が近づいていると感じ、再びボートに乗り込み、進んだ(図2の地点4~6)。先回りした陸上班が我々の到着を待っていてくれた。さらに西に進むと池の西端(図2の地点6)がみえた。ここは少し池の水に流れがあるようで水面も開けている。池の端には排水口が設置されており(図10)、池は暗渠をとおり、道路を横断し、花室川に放流されている。このエリアでもサデ網とタモ網を入れてみたがまったく何も捕れなかった。

7. 謎めいた池を巡って

一旦陸上を通り、スタート地点へ戻り、仕掛けともう1艇のボートを回収。仕掛けの中には何も入ってなかった。今回は時期が悪かったのか、それとも本当に魚はいないのか。謎が残った。一方で水鳥が多く棲んでいるということはどこかに水生生物の姿もあるはずである。時期を変えてもう一度確かめてみたい。

今回採集は不漁に終わったが、謎めいた池を巡るという燃える冒険心は何にも換えがたい。今回は池の北東部を全く踏み入ることができなかったが、地形図をみると、結構大きな水面があるようである。次回の課題として冬の大潜入を終えた(図11)。

【筆者について】

坂本 貴啓(さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには水辺でガサガサをすること。